



平成24年度 春季講座 第2回要旨

『鎌倉の禅宗彫刻』

講師：浅見 龍介さん(東京国立博物館東洋室長)

とき：平成24年5月20日(日) ところ：鎌倉芸術館

◎鎌倉の禅の広がり与中国文化

従来禅宗寺院に仏像はあまりないと考えられていたが、現在、鎌倉市内にある国宝・重要文化財40件の仏教彫刻のうち、三分の一以上は禅宗寺院にあり、そのほとんどが鎌倉時代から南北朝時代に造られたものである。このように禅宗寺院が仏像を必要としていなかったことはまったくなく、よく知られているように、鎌倉の禅宗寺院というのは、中国の禅宗寺院の影響を非常に強く受けている。ところがその仏像については、これまであまり検討されてこなかった。

1180年に源頼朝が鎌倉に入ってから、特に三代将軍実朝の頃に顕著だが、鎌倉には京都の文化が導入される。それが承久の乱を経て五代執権北条時頼の時代になると、1253年の建長寺創建に代表されるように、中国文化の影響が強く見られるようになる。文化が変わる時には強いリーダーシップが働くことがあり、この鎌倉における文化の転換にも、時頼の意思が強く働いているのではないかと思う。

時頼の息子の時宗は、中国五山から無学祖元を招いて円覚寺を創建し、建長・円覚両寺を拠点に禅宗が深く根付いていく。中国風を取り入れ鎌倉に根付いた禅は京都にも定着し、五山制度の確立により急速に全国に広がっていく。

鎌倉五山には、特に鎌倉から南北朝時代にかけて、多くの中国からの渡来僧がいた。また、中国へ留学をする僧も大変多かった。このため中国文化が非常に勢いで鎌倉に浸透し、禅宗彫刻にもその影響が強く及んでいる。

◎禅宗彫刻に見られる中国文化の影響

建長寺仏殿の地藏菩薩像は創建当時のものではなく、15世紀前半の室町時代の作と思われる。円覚寺本尊は頭部のみ鎌倉時代、寿福寺本尊は室町時代前期、浄智寺本尊も南北朝時代頃の作である。京都五山の仏像が度重なる火災に遭い、近世以降のものが多いのに対し、鎌倉五山の本尊は少なくとも室町時代に安置したもの、あるいはそれ以前の像がそのまま残っている点で、大変貴重である。造形は当時の中国で造られた像とよく似ており、抑揚に乏しくあまり写実的でない。鎌倉時代中ごろまでは運慶・快慶に代表される現実感あふれる作風が流行したが、後期から南北朝時代にはこのような中国で流行した最新モードが好まれた。

建長寺の伽藍神像もやはり中国的色彩が強い。伽藍神は、中国の禅宗寺院で伽藍の守護神として道教の神をまつたもので、建長寺をはじめとする日本の禅宗寺院にも取り入れられた。現在、中国でも古い伽藍神像は残っていないため、建長寺の伽藍神像は

おそらく世界最古の伽藍神像であり、中世の道教の神像がこれだけまとまっている例も他に見られない。

建長寺に伝わる「宝冠釈迦三尊像」は、作風から中国で描かれた画像であることがわかる。向かって右が文殊菩薩、左が普賢菩薩で、中央は普通釈迦如来なのであるが、実はここに描かれているのは毘盧遮那仏である。中国では、毘盧遮那仏が禅宗寺院の本尊としてまつられることが多い。なぜかという、禅宗は基本的には坐禅、臨済宗の場合は公案も重視するが、その理論的な部分が『華嚴経』に似ているからである。円覚寺本尊も毘盧遮那仏であることは開山無学祖元の詩文をまとめた『仏光国師語録』に記されている。しかし、南北朝時代の記録には円覚寺本尊を、「華嚴の釈迦」あるいは「宝冠の釈迦」と記している。その後、本来は毘盧遮那仏であるものが、宝冠をつけた釈迦如来として、全国的に造られるようになった。

東慶寺の水月観音像は、最近の調査の成果から、鎌倉時代13世紀後半の作と考えている。この像で注目したいのは、髻を布で包んで紐で結ぶ表現や、くつろいだ姿で坐っていることで、いずれも中国の影響によるものである。建長寺に伝わる「白衣観音像」は中国で描かれたくつろいだ姿勢の観音像の作例である。このような姿は当時の中国で大流行したにもかかわらず、日本では鎌倉にしか見られない点が重要である。

浄智寺の韋駄天像は二つの大きな特色がある。一つは瞳に黒い石を嵌めていること、もう一つは鎧の毘沙門亀甲と呼ばれる文様が、土で作られた土紋であること。いずれも中国から来た技法で、特に土紋は鎌倉でしか見られないものである。

◎世界に誇る鎌倉の禅宗彫刻

円覚寺の無学祖元坐像の迫真の描写は、運慶作の仏像にも引けを取らない造形の力があり世界に誇れる彫像である。建長寺の蘭溪道隆坐像も向き合うと反省を迫られるような迫力がある。京都五山などにも禅僧の肖像彫刻は多く残っているが、これほど見るものに迫ってくるような表現ではない。これらは礼拝する修行僧に語りかける、あるいは厳しく追求してくるような存在であり、記念に作られた他宗派の肖像彫刻とは性格が異なる。

室町時代以降も京都の禅僧であっても、鎌倉で修行することが重要であった。彼らが京都だけでなく、地方の寺院にも住むことによって、鎌倉の禅が日本各地に広がっていった。

南宋から元時代に発展した中国の禅文化をかなり生な形で輸入した鎌倉の禅文化は、源流の中国ではほとんど失われていることから、とても貴重な存在である。